

# リスク社会時代の児童文学

## 第四回 学校からの疎外と学校への疎外

目黒 強



### 一 はじめに

現在の学校は、排他的構造と相互監視が顕著に認められる点で、人間関係が液化化したリスク社会の縮図であると考えられる。そこで今回は、スクールカーストとKYに着目しながら、「空気」が支配する学校での生存戦略について検討したい。

「スクールカースト」は、教室内に認められる子どもたちの序列関係をカースト制（インドの身分制度）になぞらえた用語である。鈴木翔によれば、上位の者には「にぎやか」・「気が強い」・「異性の評価が高い」・「若者文化へのコミットメントが高い」、下位の者には「地味」・「目立たない」などの特徴が認められるという。前者はパリピ（パー

ティー・ピープル）、後者はオタクに代表されよう。スクールカーストのもとでは、同じような価値観を有す

る者がグループが構成され、他のグループとは没交渉であることが少なくない。価値観が多元化したリスク社会にあつては、同世代であっても、価値観の相違に伴う対人関係のリスクが高い。そこで、異なる価値観を有するグループと排他的関係を結び、リスクを予め回避していると考えられる。スクールカーストは、液化化した人間関係に対する防衛機制としての側面が指摘できるのである。

「空気」が支配する教室は、何気ないひと言が波紋を呼ぶような偶発性に満ちた場である。どのような言動がいわゆるトリガーになるのかわからないため、「空気」の読み合という相互監視により、教室のパワーバランスの維持に腐心することになる。しかしながら、「KY」<sup>③</sup>（空気を読まない行為もしくは人を指す）は、どのタイミンでどのような話題を誰に向けて提供するのかという教室内のルールに従わないため、スクールカーストのもとで承認されていない安全な行動指針が役に立たなくなり、メンバーの存在論